

## おわりに ～まとめにかえて～

本研究では、私たち障害がある子どもの教育に携わる者が彼らの教育的支援を巡って、通常教育の分野を視野に入れながら日頃の教育活動の展開や支援体制をどのようにしていったらよいかについて、実践と検討を行いました。

教育活動の展開や支援体制の整備・充実のいずれに関しても、通常教育側との連携・協力なしにはそれらの実現化が困難であることは言うまでもありません。したがって、本研究の方向は、障害のある子どもを巡って、通常教育の分野と特殊教育の分野がシステムや人的環境において如何に連携・協力して教育的支援に当たることができるか、という課題へと必然的に向かうこととなりました。

そこで、連携・協力の背景にある要素として以下の二つの側面に着目しました。

一つは障害がある子どもの授業活動における組織や教材等の工夫、校内支援体制の工夫、あるいは機関同士、保護者や地域との連携・協力といった、いわゆるシステムに関することです。すなわちこれらは客観的に構造化が可能な側面と言えます。

さらにもう一つは、障害がある子ども自身や保護者、あるいは障害がある子どもに携わる人々個々の意識の側面です。本来、このような側面は重要とされながらも構造化が困難であるため、直接的に記述されることがあまり多くなかったのではないかと思います。

そこで、本研究では、なるべく後者の意識的な側面が全面に展開されるよう、さまざまな内容や方法を工夫しました。

例えば、①研究者が実践現場に直接関与するフィールドワークの方法をとり、直接的な体験に基づく実践事例を数多く取りあげること努めたこと、②通常学級の教員の「特殊教育」に関する意識調査を行い、特殊教育の側が通常学級の教員とどのように連携・協力を行っていくかについて、その糸口を探ってみたこと、③さらに、インクルージョンやノーマライゼーションという大きな観点（捉え方によっては身近な観点かも知れませんが）から、連携・協力に関する社会的、心理的な分析を試したこと、等が挙げられます。

本研究で取りあげられた事例は、「学校体制・校内活動」に関するもの、「授業での取り組み」に関するもの、「地域社会を視野に入れて」に関するもの、「子どもを巡る人々の思い」にそれぞれ分類されます。これらに内包されているさまざまな具体的な工夫や課題、あるいは自省等は厳密にはそのままの形で個々の学校や地域に適合するモデルとなり得ないことは言うまでもありません。

しかしながら、それぞれの学校や地域において主体的に、創造的に「通常学級で学ぶ障害のある子ども」へのよりよい教育的な支援を実現化していくための方向性を、本研究では多少とも示すことができたのではないかと、と自負しています。

本研究を通して得られた連携・協力を実現化していくための最大の示唆は、①障害がある子どもに携わっている私たち一人一人がよりマクロ的な観点から身近な課題を分析すること、②個々人の役割やスタンスを自己決定して行く、という認識や自覚を持つこと、③さらにそのことを踏まえて子どもや保護者の立場に立った発想を徹底させることが必要である、ということでした。

最後に、本研究に携わっていただいた研究所内外のみなさまのご協力に、改めて感謝申し上げます。

平成 14 年 3 月

研究代表者  
笹本 健